「Abdominal Intraoperative Ultrasonography」

国立がんセンター外科 幕内 雅敏 編

戸部 隆吉

周知のように、わが国では肝癌が増加する一方である。日本肝癌研究会は、1965年以降全国症例を集積し追跡調査を行ってきたが、わが国の肝癌は、その大半（90%）が肝細胞癌であり、50歳台の男性に多く（男女比5:1）、高率（85%）に乙型肝炎変を合併し、B型肝炎ウイルスHBs抗原保持者が多い（約30%）という、特徴を持っている。

このような肝癌は、欧米には極めて少ないが、アジア諸国に特徴的である。したがって、その診断と治療に指針を与えることは、わが国の消化器内科・外科医に課せられた世界的使命である。肝癌は治療上特に早期診断が重要である。US、CTで積極的に診断することが、ルーチンの診断のアプローチとして普及してきている。胃癌の早期診断の確立と共に、わが国消化器内科の世界に誇りうる業績の1つと言えよう。

それと共に、わが国の肝癌外科の歴史の中で特筆すべきことに、国立がんセンター外科・幕内雅敏博士らの“USガイド下色素注入による亜区域切除術の開発”がある。手術時にUSを駆使して支配門脈に色素を注入し、区域を可視的に行い、区域切除を可能にしたことは、肝硬変合併の多いわが国の肝癌手術を最少限にとどめ、しかも術後成績を向上させた。高齢のわが国肝癌外科の特筆すべき業績と言えよう。

今回、幕内雅敏博士が、多年的努力の集約を中心として、新界の指導者と共に、著書“Abdominal Intraoperative Ultrasonography”を、医学書院から上梓された。